

## 『昭和二十年八月十五日』

—私はこうして迎えた(一)—

会員	米水津村竹野浦	小林英洲
”	”	”
”	色利浦	高橋徹
”	”	”
”	浦代浦	高宮鉄三
”	”	”
”	小浦	橋口規
”	”	”
”	浦代浦	松嶋義雄

この作品は、『米水津の歴史を知る会』が平成五年八月発行した文集の中から、転載したものです。

## 『私の終戦・八月十五日』

小林英洲

大東亜戦争が永引くにつれ、戦局は我が国に利あらず、本土は到るところ焦土と化し、本土上陸決戦に備えて、九州も西部方面軍の下に「睦部隊」が作られ、北部に五十七軍・南部(鹿児島県財部)に五十六軍司令部が編成さ

れ、自分にも昭和二十年四月、久留米戦車第一連隊補充隊連隊本部より、五十七軍司令部参謀部情報室に転属を命ぜられ赴任した。司令部といっても急造の假兵舎が杉林の中に散在し、山腹をくり抜いて地下壕を造りつつあった。軍司令官は西原貫治陸軍中将で、隷下は護南兵团・綾兵团等が配置されていた。情報室勤務であったため、彼等の戦況は逐一超短波により傍受していてよくわかっていった。ヤルタ協定・ポツダム宣言の内容など予め分かっていたのである。

八月十四日、北九州の方面軍に事務連絡のため出張を命ぜられ、早朝より部下一名を帯同財部を出発、都城より吉都線に乗車すると、途中敵機の列車銃撃の空襲に遭い、列車より脱出避難を繰り返して、漸く夕方熊本に辿りつき、宿を探して泊めてもらった。車中で一緒だった女性(小倉に入隊中の御主人に面会行)の持参した、おにぎりを警戒警報発令中の暗い室で分けて戴いた。

翌十五日早朝、熊本駅発乗車(列車は運転されていた)、隣に座った青年は奇しくも小倉に入隊するためと言い、昨日作った弁当を持っているが、おそらくぬまって(くさる)いるのでは?などと話した。午前十一時頃、漸く

方面軍司令部(北部九州なれど所在地は忘却す)に着いたところ、係官より本日正午天皇陛下の重大放送があるから謹聴するよう指示があり、司令官以下一同前庭で耳を傾けた。時々御声が聞こえにくいところもあったが、ポツダム宣言を受諾して終戦を告げ、これ以上国民に犠牲を与えるに忍びないこと、堪え難きを堪えて行かなければならないことを切々と訴えられたことは、今でも脳裏にハッキリときざみこまれている。

その瞬間、遂に来るべきものが来たと感じ、かねがね敗戦の色濃いと判断はしていたものの、現実には遭遇すると、今後我が国はどうなるのだろうかという不安を拭いさることが出来なかつた。兎に角一応は原隊に復帰せよとの指示であつたので、部下と別れて独り三年余を過ぎた懐かしの久留米から、帰りは九大線經由で夕方佐伯駅に下車、自坊には軍務中なのでよらず養賢寺に宿を願つた。当時納所さんは私の労を慰らうため、取っておきの酒一本を衣の袖の下にして船頭町の「すし安」に招待してくれた。当夜は久し振りに、遮光のない電灯で過ごすことが出来た。明るい夜は久々のことで嬉しかった。

翌十六日、日豊線に乗車せるも延岡迄、五ヶ瀬川鉄橋

は敵の爆撃のため不通、下車し徒歩にて南下中、隸下師団の軍用自動車を通りかかったので呼び止めて便乗し、都城迄辿りつき知人宅に一泊し、翌十七日午前中に漸く原隊の財部にある軍司令部に復帰した。

永い永い苦しい戦争も漸く終わったが、虚脱感をどうすることも出来ない、八月十五日。

## 『八・十五はこうして迎えた』

高橋 徹

私は左記のような戦地を経て終戦の日を迎え、そして更に三ヶ年を捕虜生活ですごした。

応召<sub>レ</sub>比島<sub>レ</sub>中国<sub>レ</sub>満州<sub>レ</sub>鶏<sub>レ</sub>寧<sub>レ</sub>東<sub>レ</sub>寧<sub>レ</sub>蛟<sub>レ</sub>河、命令のまま転属しその間、もしもあの時に、逃れ生きてきたことは幸運というよりしかない。然しまた、戦友の死を眼に焼きつけたままに今あるは誠にすまない。まさにこれは余命というものであろうか。

二十年八月は新設守備隊の下級将校として転属し、間もなかつた。その前任地東寧歩兵部隊では、狼の遠吠多